様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３３２０００９

研究課題名（和文）日中校勘学の発展と相関をめぐる複合的研究

研究課題名（英文）Combined research on the development and correlation of philological study in Japan and China

研究代表者
水上　雅晴（MIZUKAMI, MSAHARU）

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：６０２６１２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,100,000円

研究成果の概要（和文）：文字テキストの本来の姿、もしくはあるべき姿を追求してなされる校勘は、古典や経典を対象として行なわれる研究の基礎作業と位置づけられる。校勘は中国の清代に至って一つの学術分野と認められるほどの発展を遂げたが、校勘それ自体を対象とする研究は少ない。本研究では、琉球を含む日本と中国において基本的教養の書であり続けた儒家の経典を主たる材料として、それぞれの地域における校勘の発展のプロセスについて相互の影響を視野に入れながら跡づけた。同時に、校勘に従事した知識人の実態、文字の異同を示すために書き入れられた校語が持つ学術上の価値などの諸問題についても論じ、さらには校勘学上有用な新資料も発掘した。

研究成果の概要（英文）： This research project dealt with the development of the study of textual criticism in China and Japan, including the kingdom of the Ryukyus, focusing on the mutual interaction. Through the research, we gained a better understanding of the academic value of textual criticism, which was in fashion from 17th to 19th century in each region. We also found that the collative notes written on the books by the literati can reveal the condition of the circulation of classical books in a particular area, and moreover discovered some resources, such as "Nengo-kanmon", or the documents presented to discuss the new name of era in the imperial court of Medieval Japan, useful for collation of the Chinese classical books.

研究分野：中国哲学

キーワード：校勘　儒家経典　テキスト　日中学術交流　琉球漢学

１．研究開始当初の背景

古典文献を学問研究の資料とするには，テキストの信頼性・安定性を確保することが肝要であり，校勘はそれを実現する上で欠かすことのできない基礎作業と位置づけられる。中国の伝統的な学術の中心に位置する経学について言うと，儒家の経典および注釈のテキストに対する校勘は経学を構成する一つの柱であり続け，中国の学術史の中では，経典中の一字の異同をめぐる議論が長期にわたる論争にまで発展することもあった。校勘学は清代中期になると一つの学術分野と見なされるまでに発達を遂げ，豊富な資料を用い客観的な手続きに従ってなされた校勘の成果は，現在の研究においても参考にされることが珍しくない。このように，校勘学の成果は活用されておりながら，校勘に関わる営みそのものに着目した研究は，十分になされているとは言いがたいのが実情である。

大陸からの漢籍受容に関して長い歴史を持つ日本では，随時流入してくる漢籍テキスト間の文字の異同を調整する必要性が早い時期から認識されたと思われ，古鈔本中に校勘の営みが確認される。国内における漢籍校勘が高度な水準に至るまでには相応の発展プロセスをたどっているはずだが，管見の限り，国内の校勘学の発展が研究者による議論の俎上に載せられたことはない。また，江戸時代に高度に発達した日本の校勘学上の成果が中国の校勘学に少なからぬ影響を及ぼした事実は広く知られているが，影響の具体的内容についても十分に究明されていないように見える。

以上のように，儒家の経典に代表される漢籍に対する校勘に関しては未解決の解決すべき課題が多く残されているように思われ，かかる現状認識にもとづき，本研究計画を策定した。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は，中国の清代および日本の江戸時代において確立した校勘学について，相互の影響を視野に入れつつ，発展の状況と影響を多角的に解明することにある。校勘学それ自体の発展状況に関する整理が十分に行なわれているとは言えないので，まずそれを実施した上で，校勘学の発展を支えた諸々の要素も視野に入れつつ，日本と中国おのおのの学問・政治・文化・宗教などの状況が校勘学の展開に如何なる作用を及ぼしたか，かかる角度からの考究も進めて行きたい。

以上に加え，漢籍の校勘を進める上で有益な資料でありながら未発掘なものがあるので，その種の資料の入手と整理も行なう。本研究では年号勘文資料に重点をおいて収集と整理を進め，その有用性に対する研究者の認識の深まりを促すために，積極的に資料の紹介と論考の発表を行なう。

３．研究の方法

本研究では以下の項目に着目しながら研究計画を進めていく。

（ａ）資料の入手と整理

校勘学に関わる研究を進めるには，当然のことながら，多くの文献資料を必要とする。校勘に利用される資料には，同一書の異本の外に，別の書物，百科事典に相当する資料集である類書などの中国側の典籍の外，日本国内で作成される年号勘文資料や経書の講釈書たる抄物などがある。異文は，これらの書物の本文テキストを構成する場合もあれば，校語として書物の中に書き込まれている場合もある。書き入れの校語を含む資料は基本的に刊行されていないので，国内外の収蔵機関に出向いて調査を行ない，できるだけ多くの画像資料の入手を図る。入手した資料については，分類整理した上で研究グループの中で共有し，研究資料としての活用度を高める。

（ｂ）日本国内に伝存する校勘資料が持つ学術上の価値の調査

上記の作業を通して収集した異文がどの程度の学術上の価値を持つかを判断するため，それらのテキストと国内に伝わるいくつかの系統の経書テキストや国内外の学者によって作成された各種の経書の校勘記との比較を行なう。

（ｃ）日本における校勘の発展に対する考察

日本人が独自の文字を用いて言語活動を行なうようになるのは，八世紀以後のことであり，それまではもっぱら中国から入って来た書物を学習することで知識・教養を高めていた。したがって，日本人が行なう校勘は，漢籍から始まり，次第に国書にまで及ぶようになったと推察されるが，その展開のプロセスは不明なので，この部分に関する調査と考察を進める。また，日本における漢籍の校勘は，江戸時代に入って急激に高度な水準に達したように見えるが，その点に関する実態と要因の解明も図る。

（ｄ）中国の清代における校勘学の発展と日本の校勘学との関係に対する考察

清代中期に校勘学が格段の進歩を遂げたことは周知のことに属し，当時の校勘学が部分的に日本の校勘学の影響を受けていることも否定しがたい事実である。しかし，影響の内容や度合いについては，狩野直喜「山井鼎と七経孟子考文補遺」が発表されて以後，研究がほとんど進展を見せていないのが実情であり，狩野説の当否の検討を含め，この部分について事実確認をし，考察を深める必要がある。清代における学術の発展は，地方官の私設秘書である幕友によって支えられていた面があるが，校勘学に関して幕友たちがどのように関わっていたか，その実態解明も必要である。

（e）国際シンポジウムの実施
本研究で扱う資料は多岐にわたり，解決すべき課題も多方面にまたがり，研究組織を構成するメンバーだけでは十分な考察が進められない可能性がある一方で，研究計画を遂行する中で得られた知見の学術上の価値を見極める必要があるので，校勘学を主題とする学術会議を開催する。実現の見通しは立っていないが，本研究の成果を国際学界の中でアピールするため，また校勘学自体に対する研究の底上げにつながることを期待して，論文集を出版することを考えている。

４．研究成果
本研究を遂行することで得られた研究成果の概要を項目立てて説明すると，以下の通りである。

（a）国内に伝存する経書の古鈔本に書き込まれている「異文校語」（異文を表示する校語），抄物や年号勘文などに見える儒家経典の引用文には，校勘を行なう上で有用な古い異文テキストが含まれていることを明らかにし，経学文献の校勘を進める際に使うことができる資料の範囲を拡大させた。

（b）阮元『十三経注疏校勘記』を対象に調査と考察を進めた結果，清代の幕府などにおいて学術事業として作成された校勘学上の著作において，実際の校勘作業を担ったのは，名目上の編纂者ではなく，その編纂者に雇われた幕友などの読書人であることについて，新たな資料をもとに確認した。

（c）江戸時代に著された校勘学に関わる著述を見ると，客観的な結論を導き出すには，厳密な校勘の方法と依拠・参照するための古い資料が重要であることが明確に認識されていることが看取される一方で，校勘を実施する者が引証する古典籍のテキストが類書などからの孫引きであるにもかかわらず，その点が明示されてないことが少なくなく，当時行なわれた校勘には，実践面に関して問題が含まれることを明らかにした。さらには，江戸中期以降においては，中国の学界において評価されることを目的として校勘学上の事業を企画する一群の読書人がいたことも明らかにした。

（d）書き入れ校語に関する新たな価値，すなわち典籍に書き込まれる異文校語が漢籍の流通状況を判断する有力な指標となり得る，という新たな知見を獲得した。具体例を挙げると，琉球王国時代の士人によって『四書体注』に書き込まれた異文校語から，同書は王国内において多くの版本が流通していたことが判明した。また，異文校語において引証されている文献は，現在，沖縄県内で確認できないものが少なくなく，琉球王国における漢籍の流通状況をたどる上でも書き入れの校語が役に立つことを論証した。

（e）国内外における経典や古典に対する校勘を含む学術研究の個別事例に対して，校勘の観点から考察を深めた。

以上の研究成果は，学術論文に関して言うと，中国大陸において「核心期刊」に位置づけられる学問的水準の高いジャーナルに３篇の論文が掲載された。特筆すべきは，平成23 年度に主催した国際シンポジウムにおいて発表された論文を中心に編纂した研究論集が中国大陸において刊行されたことである。「研究の目的」欄に記した事項の中には，研究組織を構成するメンバーによって論じられなかったもの，あるいは論じられても深く掘り下げるに至らなかったものがあるが，研究代表者が共同主編者として関わった本書に収録されている論文によって不備のいくつかを解消することができた。換言すると，会議の参加者の協力によって研究内容を充実させることができた部分があったわけであり，国際的な学術交流・共同研究の必要性を改めて実感させられた。
本研究の研究期間は終了したが，国内における校勘の広がりと発展プロセス，それに日本による校勘の中国の学界に対する影響については，未解明の部分が多く残されており，今後も調査・研究を継続するつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 １６ 件）
① 水上 雅晴，日本における文献考証とその発展に関する試論―儒学文献の校勘を中心に―，国語論集，9，2012 年，50－80 頁

② 石井 行雄，『古今和歌集』語彙複合から見た『源氏物語』の「さ・こそ・あり」（『源氏物語大成』四九一頁十一行目私釈），国語論集，9，2012 年，44－49 頁

③ 水上 雅晴，顧広圻与《十三経注疏校勘記》――以《毛詩釈文校勘記》為考察中心，国際漢学研究通訊，6，2012 年，161－178 頁

④ 石井 行雄，『古今和歌集』の「名取川」――六二八・六五〇番歌私解，国語論集，10，2012 年，42－45 頁

⑤ 水上 雅晴，日本中世《尚書》学―以清原家的経学為考察中心，揚州学報（人文社会科学版），17－4，2013 年，54－63 頁

⑥ 水上 雅晴，吉田篁墩《論語集解攷異》中的校勘，域外漢籍研究集刊，9，2013 年，103－123 頁

⑦　水上 雅晴，琉球士人漢籍学習挙隅：以漢籍中写入的訓点和註記為考察中心，復旦学報（社会科学版），2103－6，2013 年，45－54 頁

⑧　水上 雅晴，清原家《論語》抄物における経説―清原宣賢《論語聴塵》を中心として，言語文化論叢，11，2014 年，75-94 頁

⑨　水上 雅晴，琉球中央士族的漢籍校勘―以楚南家文書為中心―，国際漢学研究通訊，9，北京大学出版社，2014 年，200-213 頁

⑩　水上 雅晴，日本年号資料在経書校勘上的価値与限制，域外漢籍研究集刊，10，中華書局，2014 年，1-13 頁

⑪　水上 雅晴，琉球中央士族の漢籍学習について―楚南家本を中心とする初歩的考察―，沖縄文化研究，41 号，2015 年，53-98 頁

⑫　江尻 徹誠，朱鶴齢に関する基礎的研究（二）―その著作と交遊について―，旭川医科大学紀要，31，2015 年，1-10 頁

〔学会発表〕（計 １５ 件）

①　Masaharu Mizukami，A Preliminary Inquiry into the History of Textual Criticisms in Japan，Reading Matters: Chinese and Western Traditions of Interpreting the Classics，オランダ・ライデン大学 International Institute for Asian Studies，2011 年 6 月 11 日

②　水上 雅晴，清原家《論語抄》中的経説―以清原宣賢《論語聴塵》為線索，従鈔本到刻本―中日『論語』文献研究国際学術シンポジウム，北京大学中国古文献研究センター，2011 年 12 月 15 日

③　水上 雅晴，日本中世期的《尚書》研究初探：以清原家《尚書》学為中心，国際《尚書》学第二回学術シンポジウム，湖南省長沙市「金楓ホテル」，2012 年 4 月 20 日

④　水上 雅晴，吉田篁墩《論語集解攷異》中的校勘，2012 東アジア儒学国際学術シンポジウム　，上海師範大学哲学院，2012 年 9 月 15 日

⑤　水上 雅晴，《十三経注疏校勘記》的編纂与幕友：以《経典釈文校勘記》為考察中心，国際漢学第十五回学術報告会，北京大学国際漢学家研修基地，2012 年 9 月 24 日

⑥　水上 雅晴，琉球士人漢籍学習挙隅：以漢籍中写入的訓点和註記為考察中心，「グローバルな視野に立った中国儒学研究」国際シンポジウム，復旦大学哲学学院，2013 年 5 月 26 日

⑦　水上 雅晴，日本年号資料在経書校勘上的価値与限制，「経学与中国文献文化」および第五回中国経学国際学術シンポジウム，南京大学文学院，2013 年 8 月 21 日

⑧　水上 雅晴，琉球四書学管窺，日本四書学史シンポジウム，台湾清華大学人文社会学院，2013 年 9 月 23 日

⑨　水上 雅晴，琉球久米士族的漢学及校勘―以楚南家文書為中心―，「校勘と経典」国際学術シンポジウム，琉球大学教育学部，2013 年 11 月 19 日

⑩　近藤 浩之，桃源《百衲襖》中之暦學興天文觀，「校勘と経典」国際学術シンポジウム，琉球大学教育学部，2013 年 11 月 19 日

⑪　近藤 浩之，日本中世易学之集大成―桃源瑞仙的易学―，2013 年南開大学哲学院講演，南開大学日本研究院，2013 年 11 月 7 日

⑫　近藤 浩之・猪野毅，明治改暦與奇門遁甲書，明清中国与日本学術研討会，香港中文大学明清研究中心・日本研究学系，2013 年 12 月 20 日

⑬　水上 雅晴，琉球王国時代的経学：以現存漢籍為線索，第二届中国経典文献的詮釈芸術国際学術研討会，香港教育学院 A 座 Reception，2014 年 10 月 17 日

⑭　水上 雅晴，清代幕府與其学術機能：以阮元幕府為考察中心，阮元研究国際学術シンポジウム，揚州会議中心ホテル，2014 年 11 月 16 日

⑮　近藤 浩之，日本における易と卜，北海道中国哲学会，北海道大学大学院文学研究科，2014 年 7 月 4 日

〔図書〕（計 ４ 件）

①　劉 玉才・高橋 智・水上 雅晴ほか，従抄本到刻本：中日《論語》文献研究，北京大学出版社，2013 年，521 頁

②　林 慶彰・銭 宗武・蔣 秋華・水上 雅晴ほか，第二届国際〈尚書〉学学術研討会論文集，萬巻楼図書株式会社，2014 年，696 頁

③　小南 一郎，水上 雅晴ほか，学問のかたち―もう一つの中国思想史，汲古書院，2014 年，340 頁

④　劉 玉才・水上 雅晴ほか，経典与校勘論叢，北京大学出版社，2015 年，536 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：

６．研究組織
(1)研究代表者
水上雅晴（MIZUKAMI MASAHARU）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：60261260

(2)研究分担者
石井　行雄（ISHII YUKIO）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60241402
近藤　浩之（KONDO HIROYUKI）
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号：60322773
佐野　比呂己（SANO HIROMI）
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60455699
江尻　徹誠（EJIRI TETSUJO）
北海道大学・文学研究科・専門研究員
研究者番号：80528232

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：